

原点に戻れ 淀川水系流域委員会

先の淀川水系委員会で運営についての意見交換が行われたので、今後の審議の進め方について意見を述べたい。

歪になった委員構成

第二次淀川水系流域委員会（以後委員会）が歪な委員構成になっていることを指摘しておいた。その一つが、猪名川、木津川部会構成委員に流域住民や流域をフィールドとする研究者が極めて少ない事だ。その結果が、木津川部会が成立せず、意見交換会になったことから、代理出席という事が持ち出されたと思われる。委員の皆さんは部会、委員会を何と考えているのか。委員は部会委員会を成立させるための頭数に過ぎないのか。皆さんそれでいいのですかといいたい。まじめな顔をして審議しているのには全く驚かされた。委員会はそれぞれの知見、経験に基づいた発言をする場であることをあらためて言わなければならないのか。いかにもレベルの低い議論を聞かされた。今後代理出席を依頼する委員、また代理出席を引き受ける委員には辞任を求めることになるだろう。

歪な二つ目が河川環境を注視して来た委員がいなくなったことだ。淡水魚、水辺の植物が不在となった。これで河川環境を議論できるのか。事実、ダムの方針が提示される前の各部会での審議内容をみると、既に別の委員会等で審議済みの事項が報告され、形ばかりの審議を行っていた。委員会はこんなことでいいのか。正に形骸化した委員会そのものを見た。この委員構成で今後出てくる整備計画が審議できるとは思われない。

歪なもう一つ、河川の問題を審議するとき、欠けているのは社会科学的知見ではないか。社会資本としての河川という言葉だけは既に一般化されているが、その内容はまだ熟知されているとは言えない。ダムを始め環境問題など従来の河川工学では処理しきれない多くの問題を考えるためにも社会科学的な知見の導入が必要なのではないか。また近年の気象を考えると、気象関係者は委員会に是非必要な委員ではないか。先に安田委員から 20 年後の気象は考えているのかという発言があったが、このテーマは洪水を考えると最大のファクターであることは議論を待たない。女性と若い人の不在は今更結うまでもないだろう。委員構成の改善が急がれる。

ダム WG は運営上の失敗であり、誤りだ。

民間人が考えると流域委員会ほど効率の悪い組織はない。特にダム WG という組織だ。提言を提出後の委員会は、ダム問題の専従になってしまい、そしてこの過ちは今回また繰り返された。これは委員会運営の重大な誤りだ。ダム WG が誤りであることは、前委員の川那部浩哉氏が「委員会活動の総括に係わる委員からの意見」の中で記している。「ある意味で失敗だったのではないかと。10 時間近くも審議したことを誇らしげに語っているが、こんな長時間、内容のある審議ができるはずがない。もし間違いだと言われるなら議事録の全文を公開していただきたい。経費がかかるなら記録のテープでもいい。聞くに堪えるものなのか 10 時間かけて聞いてみたい。そんな事はないと思うが、勉強会に経費を注ぎ込んでいるならこれはまた別の問題を引き起こす。こんな効率の悪い組織はない。とにかく委員会の運営はもっと全体のバランスを考えて行っべきだ。

住民対話集会などは内容の十分な検討もしないで、ファシリテーターに丸投げし、その後の検討もしていない。無責任そのものだ。そのほか多くの重要な議事が滞っている。

シンクタンク、コンサルは最大限使用すべき

委員会のかなで金盛委員が指摘していた通り、シンクタンクやコンサルは、可能な限り使って調査をするべきだ。そして調査報告書には、河川管理者の担当者名、コンサル社名と管理技術者とそのスタッフを明記したものすべきだ。構造計算が偽造問題の再発防止方法として担当者名を明記することになるようだが、岩倉峡の流下能力の調査報告書も、流域委員会の担当者、河川管理者の担当者と計算したコンサル名と管理技術者とそのスタッフを明記した報告書にすべきだ。奇妙な委員会を作って変な権威付けを行うのではなく、コンサルから出された調査報告書の内容を公開の場で議論し、どの曲線を採用するのか委員会が決めるべきではないのか。それが委員会の役割ではないのか。少なくとも3回にわたって議論された議事録は公開すべきだ。公開、公開といいながら非常に重要な局面になるとブラックボックスに入ってしまうのがこれまでの流域員会ではなかったか。(例えば提言のなかの「ダムは原則として造らない」とするに至る審議経過がよく見えない)

消えた地域に詳しい委員

委員会は委員自らの知見、経験に基づく意見を述べる場所であることは今更言うまでもない。それが出来る人が委員であるべきだ。主婦は主婦としての立場から意見を述べる場所でもある。もういちど川那部浩哉氏の言葉を引用したい。『「学識経験を有するもの」とは決して、例えば河川工学、水需要、水質問題、社会環境の専門職には限らない、いや、河川を総合的に捉えているのはむしろ「地域に詳しい人々」の筈だ、などと人を選びかつそのように会議を進めてきた淀川水系流域委員会は・・・』とある。淀川水系流域委員会は、初期はそのように進んでいた。河川を総合的に捉えている人々こそが、河川の本物の姿を描けるのだと思い『地域の特性に詳しい委員』に非常に期待していたのだが……。河川は、河川に関係する特定の人たちだけが跋扈するところではない。第二次委員会ではその総てがどこかへ行ってしまった。「地域の特性に詳しい委員」であった人たちが、その実績を残せなかったことがこのような結果を呼んでしまったと言えなくもない。河川の本物の姿を描ける人たちは今こそ奮起して、本来の役割を認識し、自らよって立つところを考え、知見経験に基づく意見を開陳していただきたい。河川ではあなたたちが主役なのだ。素晴らしい川の姿を描いていただきたい。